

研究報告

地域包括ケア時代における
在宅看護実習のあり方についての検討
—地域住民とともに行った高齢者への
家庭訪問実習での学生の学びの分析より—

小野塚元子¹⁾, 家根明子²⁾

¹⁾ 長野県看護大学, ²⁾ 敦賀市立看護大学

長野県看護大学紀要

第23巻別刷

2021年3月

地域包括ケア時代における在宅看護実習のあり方についての検討 —地域住民とともに行った高齢者への家庭訪問実習での 学生の学びの分析より—

小野塚元子¹⁾, 家根明子²⁾

【要 旨】本研究の目的は、高齢者への家庭訪問実習で学生が得た学びを明らかにすることにより、地域包括ケアシステムのインフォーマルな支え方である「自助」「互助」についての学びを考察し在宅看護実習のあり方を検討することである。A大学2年次に地域の老人クラブ会員とともに一人暮らし高齢者会員への家庭訪問実習を行った学生99名のうち、研究協力への同意が得られた35名の実習記録を分析した。高齢者への家庭訪問実習での学生の学びのカテゴリーとして、【高齢者理解につながる要因の気づき】【対象の全体像へのアセスメントに関する学び】【対象との信頼関係構築の重要性】【自分の生活に引き寄せ考えた学び】【継続的な健康行動への支援に関する学び】の5つが抽出された。学生は高齢者の生活の場に入り、「自助」の主体としての高齢者の生活の営みや、老人クラブ会員の「互助」活動の実際に触れて、地域住民の一人である自分の生活と比較して学んでいた。今後の在宅看護実習は、地域住民との早期関わりによる「生活者」の理解と看護職の柔軟な側面的支援の必要性、健康づくりに関連する地域課題の共有と解決のプロセスの理解、を学修する必要性が示唆された。

【キーワード】地域包括ケア、在宅看護実習、地域住民、自助、互助

はじめに

少子高齢化が進むわが国では団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据えて地域包括ケアシステム構築の推進の議論がなされ、保健・医療・福祉施策にも反映されている（地域包括ケア研究会，2013）。この動向は看護基礎教育のカリキュラムにとっても重要であり、今回の第5次カリキュラム改正においては、地域包括ケアシステムについての学習を充実させるようにとの提案がなされた（厚生労働省，2019）。

地域包括ケアシステムにおける「地域包括ケア」は、地域住民が住み慣れた地域で安心して尊厳あるその人らしい暮らしを継続することができるように、介護保険制度などのフォーマルサービスのみならず、イ

ンフォーマルサービスの多様な社会資源を活用しながら包括的・継続的に支援するものである。そして、「システム」は「自助」「互助」「共助」「公助」という4つの必要な支えにより地域全体で構築されるものである（山田，2017）。「地域包括ケア」の概念そのものはどの地域にも共通するものであるが、「システム」は、それぞれの地域の実情に応じて構築されるべきものである（長寿社会開発センター，2013；中野，2015）。このため、地域包括ケアシステムに関する学習は、各地域の実情に応じて構築されたシステムの実際やその中での看護職の役割について学ぶため、臨地実習、特に在宅看護実習が重要になってくると考える。現在の在宅看護実習は、2009年の第4次カリキュラム改正において、「訪問看護に加え、多様な場で実

¹⁾ 長野県看護大学

²⁾ 敦賀市立看護大学

2020年9月29日受付

2021年2月9日受理

習を行うことが望ましい（厚生労働省，2007）」とされたことから，各校が訪問看護ステーションでの実習に加えて，地域包括支援センター，居宅介護支援事業所，診療所や障害者活動センター，デイサービスやグループホーム，退院支援部門等，多様な場での実習を行っている（橋本ら，2015；丸山ら，2013；丸山ら，2014；野中ら，2019；清水，2015）ことが報告されている．このような多様な場での実習は，専門職による関わりや公的サービス等のフォーマルな支え方である「共助」「公助」に関する学びは得やすいが，個人や住民同士のインフォーマルな支え方である「自助」「互助」に関する学びは得にくいと考える．「自助」とは，自ら働いて，又は自らの年金収入等により，自らの生活を支え，自らの健康は自ら維持すること，「互助」とは，近隣の助け合いやボランティア等のインフォーマルな相互扶助のことである（厚生労働省，2008）．地域包括ケアシステムの推進には，「自助」「互助」の果たす役割が大きくなっていくことを意識した取り組みが必要であり（地域包括ケア研究会，2013），在宅看護実習の中にも，これからは「自助」「互助」の視点を意識した実習が必要である．

一方，学生は，殆どが「平成」以降に生まれた者たちであり，価値観・生活習慣・家族形態の変化に伴うライフスタイルが高齢者とは大きく異なる世代である．このため地域包括ケアシステムの構築における「自助」「互助」への学習は，学生の世代の特徴を前提に，対象を「生活者」として捉える視点や対象を取り巻く事象を学生自身が「我が事」と考えることができる教育への配慮が求められると言えよう．

我々は，在宅看護実習において，地域の老人クラブの協力を得て高齢者への家庭訪問実習を行った経験がある．この実習は，地域住民が行っている老人クラブ会員間の互助活動の場に学生が参加する形での実習である．よって，地域包括ケアシステムを学ぶ観点から，学生はこの実習を通して，インフォーマルな支え方である「自助」「互助」についての学びを得たことが推察される．ここでは，この実習で得られた学生の学びを明らかにすることにより，地域包括ケア時代の在宅看護実習のあり方を検討する．

目的

高齢者への家庭訪問実習で学生が得た学びを明らかにすることにより，地域包括ケアシステムにおけるインフォーマルな支え方である「自助」「互助」についての学びを考察し，地域包括ケアシステムの理解につながる在宅看護実習のあり方を検討する．

高齢者への家庭訪問実習の概要

A大学の在宅看護実習は，表1に示したように施設実習と合わせて2年次後期から3年次前期に高齢者への家庭訪問を行い，4年次前期に健康課題に応じた高齢者への健康教育を実践する実習を行っている．在宅看護実習において，「地域で生活する人々の暮らし方や暮らしを成り立たせる知恵や工夫，価値観等に直接触れ，生活する力を理解する」ことを目的の一つとして位置づけており，それを学ぶ方法として高齢者の家庭訪問実習がある．この実習は，家庭訪問や健康教育を通して学生と関わりを持つ高齢者を「プライマリーファミリー」と呼び，同じ高齢者に継続的に関わる形で展開している（表1，図1）．

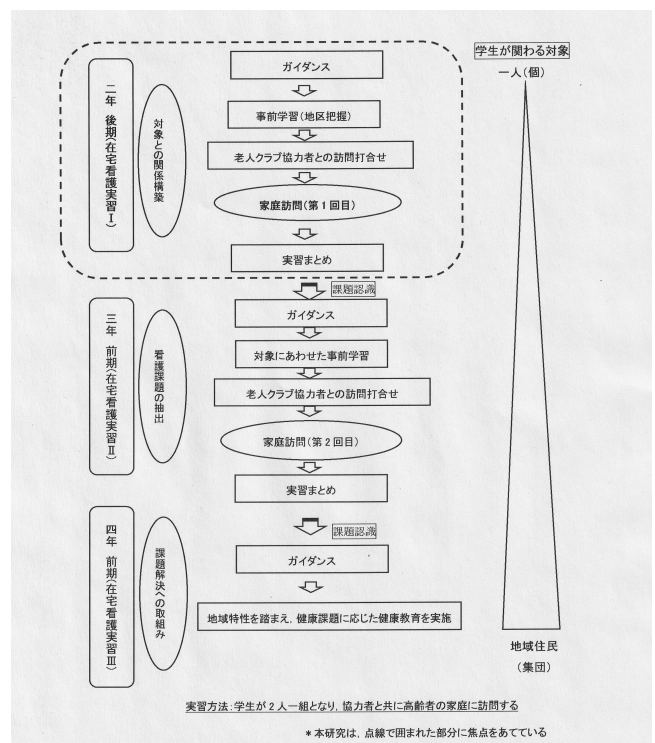


図1. 在宅看護実習における高齢者への家庭訪問実習の全体像

表 1. 在宅看護領域におけるカリキュラムの概要

学年	科目	目的	方法
1	在宅看護概論(後期)	・人々の生活の基盤となる在宅において行われる看護の特徴や対象の特性を理解する ・在宅看護が必要とされる背景をとらえながら在宅看護実践の手段としての訪問看護の目的・特徴や対象を取り巻く地域包括ケアシステムに関わる関係職種との協働を学ぶ	講義
2	在宅看護方法論(前期) 在宅看護実習Ⅰ(後期)	・生活の場において主体的に療養生活を送るための援助方法を理解す <在宅看護実習全体>	講義 実習
3	在宅看護実習Ⅱ (前期・後期)	・地域で生活する人々の暮らしぶりや暮らしを成り立たせる知恵や工夫、価値観等に直接触れ、生活する力を理解する ・より良く生きるための個人や集団のニーズを知る機会を得て、創意工夫をもって人に寄り添う看護実践能力を開発する <在宅看護実習Ⅰ> ・自らを取り巻く環境とコミュニティの機能を理解 ・ PF*の生活する環境と健康課題を理解 <在宅看護実習Ⅱ> ・地域の健康政策機関の機能を理解 ・PFの健康課題に対する援助を理解	在宅看護実習Ⅰ 企業・学校・在宅 在宅看護実習Ⅱ 保健所・市町村・在宅
4	在宅看護実習Ⅲ(前期)	<在宅看護実習Ⅲ> ・様々な健康状態にある人々に対する地域の政策と機能、健康に関する政策形成過程を理解 ・PFの健康課題に対する援助を実践	在宅看護実習Ⅲ：地域・在宅 保健所・市町村・在宅

*PF:プライマリーファミリー

高齢者への家庭訪問実習の全体像と本研究で焦点をあてた部分は、図1に示すとおりである。ここでは在宅看護実習での家庭訪問実習の位置づけと概要、協力者の役割、教員の役割の3点について、焦点をあてた部分を中心に述べる。

1) 在宅看護実習における家庭訪問実習の位置づけと概要

(1) 実習目的

学生が地域に暮らす人のおかれている環境を理解したうえで、健康課題をアセスメントし、根拠に基づいた看護活動を実践できる基礎的能力を養うことである。

(2) 実習方法

学生は2人1組となり、A大学があるB地区の老人クラブの協力を得て、2年次後期1回、3年次前期1回に、老人クラブ会員とともに一人暮らし高齢者会員（以下、高齢者）への家庭訪問を行う。B地区の老人クラブによる協力は、B地区に残る伝統的な地縁により以前からA大学他学部との良好な関係が築かれていたことから実現した。

高齢者への訪問依頼は、B地区の老人クラブ内において高齢者訪問を担当している会員（以下、協力者）を通じて行った。B地区は13か所の小地区があり、それぞれの小地区から選出さ

れた協力者毎に、高齢者に訪問依頼を行ってもらった。高齢者の選定は、学生の訪問を受け入れてくださる方を前提に協力者に一任した。高齢者のほとんどが年齢80歳代の女性であった。

学生は、担当教員が設けたガイダンス日を利用して同行する協力者と顔合わせをし、互いの自己紹介、訪問先高齢者の情報収集や訪問時の注意事項の確認、訪問日程調整を行い、訪問前の準備を行う。そして、決まった日時に協力者とともに高齢者宅を訪問する。学生は、高齢者と直接会話すること、協力者と高齢者の会話の様子を観察すると共にそれに加わることで、自宅内の様子や訪問先の周辺環境を観察し把握することを手掛かりに、高齢者の生活の様子や健康状態を捉え健康課題をアセスメントし実習記録にまとめる。学びの共有は、2年次訪問終了後と3年次訪問終了後に学生全体で実施した。

2) 実習協力者であるB地区老人クラブ会員の役割

実習協力者であるB地区の老人クラブ会員は、前述した学生への関わりに加え、家庭訪問前に高齢者に対して、大学が準備した実習説明資料を用いた説明、学生への情報提供の許可、訪問日時の調整を行い、訪問時に高齢者と学生が互いに話しやすいよう両者の橋渡し役を務める。

3) 担当教員の役割

実習全体の打ち合わせは、実習開始前、実習終了後に実習責任者2名が中心となっており、担当教員は学生5～6組を担当し、訪問活動がスムーズにいくよう学生に関わる。具体的には、訪問前は学生が高齢者の情報を踏まえて考えた訪問時の観察ポイントの確認、訪問後は必要に応じて協力者と連絡をとりあい学生の訪問時の様子を把握するとともに、実習記録をもとに学生と訪問の振り返りを行った。

研究方法

今回は、2年次に行った1回目の家庭訪問での学生の学びに焦点をあてた。

1. 対象

A大学2年次で2011年11月～2012年1月の期間に1回目の高齢者への家庭訪問を行った学生99名のうち、研究協力への同意が得られた35名の実習記録。

2. データ収集方法

2年次後期の家庭訪問終了後に学生が提出した在宅看護実習記録の「実習を終えての学び」に記載されている学びの内容をデータとして取り扱った。

3. データ分析方法

記載されている内容を一文一意味として切り取りコードとした。コードの類似性にしがってカテゴリー化し、コードの意味を損ねないように要約した一文をサブカテゴリーとした。さらに抽象度を高めカテゴリーを生成した。分析は、随時データにもどり分析結果が適切であるかを検討した。また、研究者2名で議論を重ね、分析の妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

所属の倫理審査委員会の承認（承認番号：11-13）を得た後に、学生に研究の目的、方法や匿名性の保持について、研究への協力は自由意思であり、研究の同意後も撤回可能であること、また、研究協力の有無は成績と無関係であることを口頭と文書にて説明した。説明後、同意書に記入することで同意を得た。また、分析は、実習評価が影響しないように評価が確定した後に行った。

結果

同意が得られた学生35名の実習記録から75コードが抽出された。それをもとに分析した結果、高齢者への家庭訪問実習での学生の学びのカテゴリーとして、【高齢者理解につながる要因の気づき】【対象の全体像へのアセスメントに関する学び】【対象との信頼関係構築の重要性】【自分の生活に引き寄せ考えた学び】【継続的な健康行動への支援に関する学び】の5つと、それらを構成する16のサブカテゴリーが抽出された（表2）。

以下に、カテゴリー毎にその内容について詳しく記載する。本文中の【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、＜ >はコードを示す。

1. 【高齢者理解につながる要因の気づき】

学生の家庭訪問の対象は一人暮らし高齢者であった。学生は、＜独居であっても友人や家族と過ごす時間が多く趣味を楽しんでいることがわかった＞＜趣味など作り外出しなければ、家の中で1日の生活が過ぎ去っていく＞など、自分が持っていた《一人暮らし高齢者の生活に対するイメージの変化》に気づいていた。高齢者全体のイメージについても、＜喪失だけでなく、知識や趣味・生活リズムなどの面で獲得することも多い＞＜高齢者は自ら情報を得て行動する力をもっている＞など、《高齢者の強みの存在》に気づいていた。また、＜地域を歩くことで高齢者の生活の大変さや便利さに気づくことができる＞など、学生は高齢者の暮らす環境を把握することによって、《高齢者の生活と環境との密接な関係性》に気づいていた。

高齢者の中には心疾患など生活習慣病を抱えながら生活している者もいる。学生は、高齢者が疾患を持ちながらどのように健康を維持しているかなど生活と健康の繋がりについて高齢者から聴くことにより、＜過去や現在の生活・性格・価値観が結び付いて高齢者の健康が存在している＞など、《高齢者の健康観》に気づいていた。

学生は老人クラブ会員とともに高齢者宅を訪問している。老人クラブ会員と高齢者との関わりを間近に見ることによって、＜周囲の人々との良好な関係構築により、互いに支えあいながら生活できることにつな

表 2. 高齢者への家庭訪問実習での学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー(コード数)	コードの抜粋
高齢者理解につながる要因の気づき	一人暮らし高齢者の生活に対するイメージの変化(3)	独居であっても友人や家族と過ごす時間が多く、趣味を楽しんでいることがわかった 趣味など作り外出しなければ、家のなかで1日の生活が過ぎ去っていく
	高齢者の強みの存在(3)	喪失だけでなく、知識や趣味・生活リズムなどの面で獲得することも多い 高齢者は自ら情報を得て行動する力をもっている
	高齢者の生活と環境との密接な関係性(6)	居住地の周辺環境は、高齢者の生活に大きく関り、高齢になるほど重要性が増す 地域を歩くことで高齢者の生活の大変さや便利さに気づくことができる
	高齢者の健康観(5)	過去や現在の生活・性格・価値観が結びついて高齢者の健康が存在している 外見だけで健康だと判断してはいけない(例:ペースメーカーの植え込み)
	高齢者とコミュニティとのつながりの重要性(4)	周囲の人々との良好な関係構築により、互いに支えあいながら生活できることにつながる 住んでいる地域や人々の存在が一人暮らし高齢者の生活に大きな影響を与えている
	高齢者の生きてきた過程を理解することの重要性(3)	過去の高齢者の背景を知ることが性格や意思の理解につながる 対象が生きてきた時代背景を知ると対象の理解が深まり、尊重した関りができる
対象の全体像へのアセスメントに関する学び	対象の生活の場への訪問を重ねる重要性(4)	そこに生活している人しかわからないことも多いので、定期的な訪問を通して関係を結び、情報を得ていく必要がある 1回の訪問で対象の思いのすべてを把握・理解することは困難
	対象との何気ない会話の中からの情報収集(7)	何気ない会話の中からも得られる情報が沢山あることを学ぶことができた 質問の返答として返ってきた答えに、疑問を持つことやそれについて考えることが必要だと学んだ
	対象の言葉以外からの情報収集(6)	検査値を簡単に入手できないため、目で見た特徴が判断の大半を占める 表情やしぐさの観察、生活環境など様々な視点から情報を収集し、アセスメントにつなげることが大切
	包括的に対象を捉える(5)	看護の視点をもつことで、広い視野で対象を捉えることができる 本人から聴いた話、観察した情報を統合していくことが必要
対象との信頼関係構築の重要性	対象に適したコミュニケーション技法を用いる重要性(8)	初対面の相手にプライベートな内容を話してくれる対象の気持ちに配慮した聴き方が出来なくてはならない 高齢者と話すときの声の大きさ、テンポ、興味ある話題などを知ることができた 情報を得ることにとらわれず、対象のことを考え共感、傾聴の姿勢で関わる大切 一方的ではなく高齢者と一緒に楽しみながら何かを行うかかわり方が大切
	信頼関係構築のための関わり方(7)	
	訪問時のマナーや態度の重要性(6)	礼儀やマナーを大事に接することで、信頼関係構築につながる 訪問時のマナーにつながる一般常識も身につけておく必要がある
自分の生活に引き寄せ考えた学び	高齢者との世代間の違い(3)	私達との生活感の違いを感じた 不便のない住環境と思えても、高齢者からみると違う
	高齢者に対する政策やサービスへの関心(3)	自分の生活の場を意識してみようになり、サービスにも関心が向くようになった 現在行われている対策、不足している対策について自分の意見をもつきっかけとなった
継続的な健康行動への支援に関する学び	継続的な健康行動への支援(2)	継続的に健康行動が行えるよう健康の増進に関し、必要な情報を提供する 現在の健康行動を支持する方向が大切

る>や一人暮らし高齢者の生活に<住んでいる地域や人々の存在が一人暮らし高齢者の生活に大きな影響を与えている>など、《高齢者とコミュニティとのつながりの重要性》に気づいていた。

2. 【対象の全体像へのアセスメントに関する学び】

学生が訪問した高齢者の年齢は80歳代であった。学生は高齢者から80歳代に至るまでの高齢者の体験を聴くことによって、<過去の高齢者の背景を知るこ

とが性格や意思の理解につながる>など、《高齢者の生きてきた過程を理解することの重要性》から高齢者の全体像を理解していた。

学生は、<そこに生活している人しかわからないことも多いので、定期的な訪問を通して関係を結び、情報を得ていく必要がある>など、その地域を自分自身で訪問することによってはじめて理解できるという《対象の生活の場への訪問を重ねる重要性》に気づいていた。また、情報収集については、<何気ない会話の中からも得られる情報が沢山あることを学ぶことができた>など、《対象との何気ない会話の中からの情報収集》と<表情やしぐさの観察、生活環境など様々な視点から情報を収集し、アセスメントにつなげることが大切>など、《対象の言葉以外からの情報収集》に気づいていた。さらに、情報収集したことを<看護の視点をもつことで、広い視野で対象を捉えることができる>など、看護の視点をもって《包括的に対象を捉える》ことが対象の全体像のアセスメントにつながることに気づいていた。

3. 【対象との信頼関係構築の重要性】

学生は、初対面の高齢者に対して<初対面の相手にプライベートな内容を話してくれる対象の気持ちに配慮した聴き方が出来なくてはならない>や、老年期にある対象に合わせた<高齢者と話すときの声の大きさ、テンポ、興味ある話題などを知ることができた>など、《対象に適したコミュニケーション技法を用いる重要性》に気づいていた。また、対象との援助的関係を築いていくためには<情報を得ることにとらわれず、対象のことを考え共感、傾聴の姿勢で関わる>ことが大切>など、《信頼関係構築のための関わり方》が重要であること、そのためには、<礼儀やマナーを大事に接することで、信頼関係構築につながる>など《訪問時のマナーや態度の重要性》に気づいていた。

4. 【自分の生活に引き寄せ考えた学び】

学生は高齢者の生活と自分の生活の比較を通して、<私達との生活感の違いを感じた><不便のない住環境と思えても高齢者からみると違う>など、《高齢者との世代間の違い》に気づいていた。さらに、<自分の生活の場を意識してみるようになり、サービスにも関心が向くようになった>など、《高齢者に対する政

策やサービスへの関心》を持つようになった。

5. 【継続的な健康行動への支援に関する学び】

学生は家庭訪問を通し、一人暮らしを継続できている高齢者に接し、<継続的に健康行動が行えるよう健康の増進に関し、必要な情報を提供する>ことや、<現在の健康行動を支持する方向が大切>など、高齢者が現在の暮らしを継続するために《継続的な健康行動への支援》が重要であると気づいていた。

考察

学生が高齢者への家庭訪問実習から得た学びを、地域包括ケアシステムにおけるインフォーマルな支え方である「自助」および「互助」に焦点をあてながら、

1. 看護の対象を「生活者」として捉え、地域包括ケアシステムの「自助」「互助」を学ぶ、
2. 学生自身が「我が事」として捉え、地域包括ケアシステムの「自助」「互助」を学ぶ、

という2つの視点から地域包括ケアシステムの理解につながる在宅看護実習のあり方について考察する。

1. 看護の対象を「生活者」として捉え、地域包括ケアシステムの「自助」「互助」を学ぶ

看護の対象理解の共通概念は、人を「生活者」として捉えることである。「生活者」として捉えるということは、対象が住み慣れた地域で営む生活そのものを捉えることに他ならない。現在の看護基礎教育では、看護の対象を「生活者」として捉えることの重要性を強調しながらも、実習場が病院・施設であることが多いため、受け持つ対象者を「生活者」として捉えることには難しさがある（岩崎ら、2016）。例えば、病院実習の中でよく経験する例として、学生は実際目にしている対象の入院生活は捉えることができるが、対象から聞く入院前の日常生活の様子については、話だけではイメージができず捉えることが難しいということがある。これは、若い世代において生活体験が乏しくなっている（厚生労働省、2011）ことも一因である。そのため北島ら（2017）が示唆したように、新人看護師の社会人基礎力が、学生時代の「授業時間以外に自己学習する」「異性の友達とコミュニケーションをもつ」「新聞を読む」「身近な人の看病や介護をする」といった日常生活経験の影響を受けているこ

とからも、学生が日常生活における主体的な学習活動や多様な人々との交流の機会を多く持つことができる環境を整えることが重要である。

今回の「高齢者への家庭訪問実習での学び」のカテゴリーの中でも、【高齢者理解につながる要因の気づき】は、学生がとらえた看護の対象理解への学びである。学生は、高齢者の生活の場に直接入り、高齢者がどのようなことを考え生活しているかの実際を、《一人暮らし高齢者の生活に対するイメージの変化》《高齢者の強みの存在》《高齢者の生活と環境との密接な関係性》《高齢者の健康観》《高齢者とコミュニティとのつながりの重要性》として捉えることができた。これは、自分とは異なる年代との密な交流経験によりもたらされた気づきであり、そのためには【対象との信頼関係構築の重要性】を学生は実感している。よって、学生が看護の対象を「生活者」として捉えることを学ぶために対象の生活の場に入り、その営みに直接触れる機会を持ちながら、信頼関係の構築を通して理解を深めるための学びが得られる家庭訪問実習の意義は大きい。

学生は【対象の全体像へのアセスメントに関する学び】において、看護の対象である高齢者の全体像を《高齢者の生きてきた過程を理解することの重要性》から捉えようとしている。訪問を通して高齢者の尊厳と主体性に気づく機会を得ていると評価できる。学生は、高齢者のその人らしい生活の実際を、生活環境の中に入ることを通して、《高齢者の生活と環境との密接な関係性》の気づきから、《高齢者の健康観》がどのように形成されるかにも着目している。さらに《高齢者の生きてきた過程を理解することの重要性》の意義を理解している。つまり、高齢者が培ってきた生活習慣や価値観が、その人生経験に大きく影響を与えていて、それを理解することが重要だと学生は学んだと言える。我々は、地域包括ケア時代の実習を考えるにあたり、学生に、対象への深い理解につながる生活習慣や価値観に影響する高齢者の生活史への着目を促す必要がある。そのために生活の営みに触れる経験を通して学生の想像力を高める働きかけも必要と考える。以上の学生が捉えた高齢者の具体的な「生活者」像から、地域包括ケアシステムの「自助」につながる学び

を考えてみると、【高齢者理解につながる要因の気づき】における《高齢者の強みの存在》《高齢者の健康観》《高齢者の生活と環境との密接な関係性》が挙げられる。「自助」とは、単に、自分の身の回りのことを自分でするという意味だけでなく、地域の中でその人らしい生活を継続するために、可能な限り自分のことを自分で決め、自らの健康づくりに励むといったセルフケア、自己管理に対する義務を含む（地域包括ケア研究会、2013）。つまり、自分の生活全般について自己決定し自分らしい生活を継続することである。家庭訪問実習を通して、学生は高齢者を地域の中で《高齢者の強みの存在》を持ち、自ら情報を得て自分で決め行動することができる主体的な人であると捉えたと考える。地域包括ケアシステムにおいて、高齢者は、介護保険サービスや様々な社会資源を利用する人である前に、自らの生活を自ら支える「自助」の主体（地域包括ケア研究会、2013）とされ、学生はこのことを捉えることができていたと考える。

「互助」につながる学びは、【高齢者理解につながる要因の気づき】における《高齢者とコミュニティとのつながりの重要性》に代表される。今回、学生は老人クラブ会員とともに同じ会員である一人暮らし高齢者宅を訪問しており、この活動は高齢者が高齢者を支えるという「互助」活動である。つまり、学生は地域包括ケアシステムの中で、高齢者というものを単なるサービスの利用者という立場だけではなく、互助の担い手として同世代の人を支える社会資源としての役割も有することを学んでいる。また、この「互助」活動は、地域における高齢者のつながりの希薄さへの予防にも成り得る活動と言え、介護状態に陥ることへの予防を促進する側面も有すると言える（地域包括ケア研究会、2017）。学生の体験を通しての学びは、高齢者のみならず障害者や母子など社会資源に適切にアクセスできない可能性を有する人々に対し、地域住民が支え、地域社会の中で暮らしやすく、包摂していく支援の必要性（厚生労働省、2019）にも気づく契機となる体験でもあることを伝えていくことも必要と言えよう。しかし、互助活動は、地域の様々な要因により必ずしも存在するものではない（地域包括ケア研究会、2013）。学生が訪問した地域は、伝統的な地縁が大切

にされるところであり、この活動は既に30年以上にわたり継続されているが、少子高齢化の進行に伴い地域の状況が変化すると、継続が困難になることも十分に考えられる。叶谷（2016）は、「地域包括ケアシステムはその概念が打ち出されたものの、具体的な内容についてはそれぞれの地域にゆだねられている。そのため、そのシステムの中心として活躍が期待される看護職は柔軟な考え方でこのシステムを構築していくスキルが必要になってくると考える」と述べている。つまり、地域包括ケアシステムにおける「互助」は、地域の中に必ず存在するものではなく、地域住民が意識して作り上げていくものであり、それを看護職が側面から柔軟に支援していくのだと学生が気づけるような仕掛けが必要である。同時に、住民が地域の中で互助意識を醸成するためには、地域がどのような課題を抱えた状態にあるのかを把握する視点が必要であり、学生が住民との経験を通して、多様な地域の課題を住民の目線で捉え、住みやすいと感じる地域づくりが必要である。学生が地域に合った互助の継続や創出についても、地域住民と一緒に考えることができるような実習のあり方が必要ではないかと考える。そのためには学年早期から地域に入り、住民と関わり、生活者を理解する機会を持つ教育が必要である。

従来の実習は横断的側面が強かったが、これからは縦断的視点を持って地域を捉える支援が必要と考える。そのためには、まず地域の歴史を知ることから始め、今の課題や特性を把握、考察する学習も設けることが求められる。

2. 学生自身が「我が事」として捉え地域包括ケアシステムの「自助」「互助」を学ぶ

今回の高齢者への家庭訪問実習での学びのカテゴリーの中で、【自分の生活に引き寄せ考えた学び】は、学生が自分の生活と高齢者の生活を比較して高齢者の生活の実際を捉えたことから、その違いに気づき、今まで関心のなかったサービスについての関心やサービスに対する自分なりの問題意識が生まれた学びである。これは、学生が得た自分を起点として地域に暮らす人や地域社会に対する気づきであり、専門職目線というより住民目線の捉え方、つまり、「我が事」としての捉え方であると考え。本来、地域包括ケアシス

テムは、高齢者に限定されるものではなく地域のすべての住民にとっての仕組みであり、地域包括ケアをより広い視点から捉える社会的な姿勢の意識付けを行っていくことが重要である（地域包括ケア研究会、2013）。つまり、学生も地域住民の一人として「自助」「互助」をもって地域包括ケアシステムを支える一人と言える。山田ら（2019）は、地域包括ケアでは、全部のことを「仕事」としていたら成り立たない、自分たち医療者も地域住民の一人である、看護というアイデンティティをもって、仕事も生活もして、オンタイムとオフタイムのボーダーラインがどんどん曖昧になっていくのが地域包括ケアの時代であると述べている。これからの地域包括ケア時代の在宅看護実習では、「共助」「公助」という専門職としての支え方を学ぶことはもちろん大切であるが、「自助」「互助」という地域住民としての支え方を学ぶことにも注力することが必要であると考え。廣井ら（2017）が述べているように、学生が住民と交流する演習を体験したことにより、地域住民に対する魅力を発見するとともに、愛着が沸き上がったと感じていた。このことから、住民との交流は学生の気持ちを変化させ、住民をより身近な存在として捉えるとともに「我が事」として考える効果がある。学生が家庭訪問実習を「自助」「互助」を学ぶ機会とするためには、【継続的な健康行動への支援に関する学び】を通して、長期的な住民への関わりを学生が経験しながら、健康づくりに関連する地域の課題を見つけ、住民との共有を通して解決するプロセスを学ぶ場と機会を設けることが求められると考える。小原ら（2019）は、利便性の高い生活環境で育った背景やグループ学習やインターネット利用といったこの世代の学生が好む学習スタイルを理解することが必要だと述べている。学生が育ってきた環境も踏まえ、効果的な教授方法も検討していかなければならない。

結論

地域包括ケアを意識した在宅看護実習のために、学生が育ってきた環境を踏まえ、次の点を考慮した教授方法の検討が必要である。

1. 学年早期から地域住民と関わり、「生活者」を理

解する機会を設ける。

2. 地域包括ケアシステムにおける地域住民の「互助」を育むために、看護職の柔軟な側面的支援の必要性を理解する機会を設ける。
3. 縦断的視点をもって地域を捉え、健康づくりに関連する地域の課題を、住民との共有を通して解決するプロセスを学ぶ機会を設ける。
4. 上記の1～3の関わりの中で、学生が自分の生活を振り返り「自助」についての学びを深める機会を設ける。

研究の限界と今後の課題

本研究では高齢者を対象とした訪問活動から得た学生の学びを通して地域包括ケア時代の在宅看護実習のあり方を検討した。今回は分析対象数が少ないため結果の一般化には限界がある。しかし、地域包括ケアを意識した在宅看護実習に向けて課題を検討できたことは、在宅看護実習の検討の一助になると考える。地域包括ケアシステムは全世代型のシステムであることから、今後は、様々な特性を持つ地域や高齢者以外の世代への関わりを通しての検討も必要である。

謝辞

本研究にご協力いただいたA大学学生の皆様に感謝申し上げます。

利益相反（COI）に関する開示：本研究内容に関し、開示すべき利益相反はありません。

文献

- 橋本茜，作山美智子（2015）．在宅看護実習の展開と学生の学び．東北文化学園大学看護学科紀要，4（1），81-89.
- 廣井寿美，山下敏子，剣持和美，他3名（2017）．地域・住民とのかかわりを経験した看護学生の地域に対する印象【第1報】地域演習後の印象の質的評価．日本看護学会論文集（看護教育），47，7-10.
- 岩崎りほ，平井和明，板井理枝，他2名（2016）．高齢者の健康と生活から学生が学ぶ予防的家庭訪問実習．看護展望，41（10），42-46.
- 叶谷由佳（2016）．地域包括ケアシステムを見据えた

看護教育に必要なこと．看護展望，41（10），12-18.

北島洋子，細田泰子（2017）．新人看護師の社会人基礎力と関連要因の検討．奈良学園大学紀要，7，35-44.

小原泉，中村美鈴，永井優子，他6名（2019）．看護学生の生活行動 生活体験および学習態度．自治医科大学看護学ジャーナル，16，3-8.

厚生労働省（2007）．看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2020.3.13).

厚生労働省（2008）．地域包括ケア研究会報告書～今後の検討のための論点整理～．<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/05/dl/h0522-1.pdf> (2020.11.14).

厚生労働省（2011）．看護教育の内容と方法に関する検討会報告書．<https://www.Mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y-att/2r985200000131bh.pdf> (2020.3.19).

厚生労働省（2019）．「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」（地域共生社会推進検討会）最終とりまとめ．<https://www.mhlw.go.jp/content/12602000/000581294.pdf> (2020.3.28).

厚生労働省（2019）．看護基礎教育検討会報告書．<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2020.3.13).

丸山純子，栗本一美（2013）．在宅看護実習における居宅介護支援事業所での学生の学び—在宅看護実習記録「看護職としての視点」の分析から—．新見公立大学紀要，34，79-83.

丸山純子，栗本一美（2014）．在宅看護実習における学生の学び—診療所・障害者地域活動支援センターでの健康教室実施報告書の分析—．新見公立大学紀要，35，97-101.

中野いく子（2015）．地域包括ケアの推進を目指して．学術の動向，2015（1），75-79.

野中弘美，金子美千代，米増直美，他3名（2019）．訪問看護実習における学びの分析．鹿児島大学医学部保健学科紀要，29（1），55-61.

清水純一（2015）．首都大学東京における在宅看護実

習の目標と進め方. 日本在宅看護学会誌, 3 (2), 25-29.

地域包括ケア研究会 (2013). 持続可能な介護保険制度及び地域包括ケアシステムのあり方に関する調査研究事業報告書 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点. https://www.murc.jp/uploads/2013/04/koukai130423_01.pdf (2020.3.13).

地域包括ケア研究会 (2017).「地域包括ケア研究会—2040年に向けた挑戦—」. https://www.murc.jp/sp/1509/houkatsu/houkatsu_01/h28_01.pdf8 (2020.3.28).

長寿社会開発センター (2013).「地域ケア会議運営マニュアル」 14, <https://nenrin.or.jp/regional/pdf/manual/kaigimanual00.pdf> (2020.3.30)

山田雅子 (2017). 第1章 在宅看護の目的と特徴 B在宅看護における看護師の役割 ①超高齢多死社会の進展と地域包括ケア. 河原加代子, 在宅看護論 (第5版). 医学書院, 17-20, 東京都.

山田雅子, 池西静江 (2019).【対談】地域包括ケア時代の看護基礎教育とは 指定規則の改正をチャンスに,自由に,地域に開かれた学校へ. 看護教育, 60 (2), 90-98.

【Report】

Examination of the ideals of home nursing practical training for today with community-based comprehensive care : Analysis of students learning from home-visit training for elderly persons conducted with local residents

Motoko ONOZUKA¹⁾, Akiko YANE²⁾

¹⁾ Nagano College of Nursing, ²⁾ Tsuruga Nursing University

【Abstract】 This study aims to understand the learning that students have acquired through home-visit training for the elderly, and to examine the learning about self-help and mutual help, which are informal support methods in a community-based comprehensive care system, to elucidate ideal ways for home nursing practical training. Ninety-nine second-year nursing students of University A who participated in home-visit training in which they visited single household elderly members of a seniors' club in a community together with other members of the club. Of the nursing students 35 expressed consent to participate in the study, and we analyzed their training records. The analysis identified five categories of students learning in home-visit training for the elderly: "Awareness of factors leading to an understanding of the elderly", "Learning about assessments of the overall impression of the subjects", "Importance of building a mutual trust relationship with the subjects", "Learning obtained by thinking of the situation of the elderly person as that of oneself", and "Learning about support for continuous health activities". Students were learning about the life of the elderly by entering their living place, experiencing the daily life activities of the elderly as the subject of self-help and activities of mutual help of the club members, and comparing the lives of their own as a local resident. The findings suggest that future home nursing practical training needs to include components that help students understand people in their daily lives and the necessity of providing flexible nursing assistance and sharing information about community problems related to health promotion, as well as instilling an understanding of the process of solving problems that arise, through interaction with local residents at the earliest time.

【Keywords】 community-based comprehensive care-home nursing practical training, local residents, self-help, mutual help

小野塚元子
〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地
長野県看護大学
Tel:0265-81-5157 Fax:0265-81-5157
E-mail:onozuka@nagano-nurs.ac.jp
Motoko ONOZUKA
NaganoPrefecture
Nagano College of Nursing
1694Akaho,Komagane,Nagano,399-4117JAPAN
TEL:+81-265-81-5157 FAX:+81-265-81-5157
E-mail:onozuka@nagano-nurs.ac.jp